

● 第14回野外見学会の御報告 ●

平田 正礼

すっかり暖かくなった2001年4月22日（日）、21世紀の最初の見学会の場所選ばれたのは、吾川郡吾北村、三波川帯と秩父帯の境界になっている上八川―池川構造線の上にある中新世の珪長質火成岩類の貫入です。

今回の参加者は非常に多いということでしたが、昨年入会したばかりの私にはよくわかりません。ただ言えるのは、私や吉倉先生が1回生を数人連れてきたので参加者の平均年齢はかなり低かったということです。



最初のポイントは柳野のデイサイト（石英安山岩）柱状節理。高知では唯一の柱状節理で、腕よりも太いくらいの長細い岩が同じ向きで規則正しく積み重なったような外観をしています。

節理とは、「岩石中の明瞭な割れ目」です。じゃ断層も節理になるのかといえ、そういうわけでもあり

ません。なぜなら、もう一つの条件として「割れ目の面に平行な相対的変位が全く無い、あってもごく僅かなもの」があるためです。そのため、断層は節理にはなりません。節理には何で変位が無い(ズレていない)かというと、高温の岩石が冷えて固まったときに体積が減少することで発生するヒビだからです。そして、そのヒビは熱源から外側に向けて垂直に並ぶので、かのように規則正しく並ぶわけです。

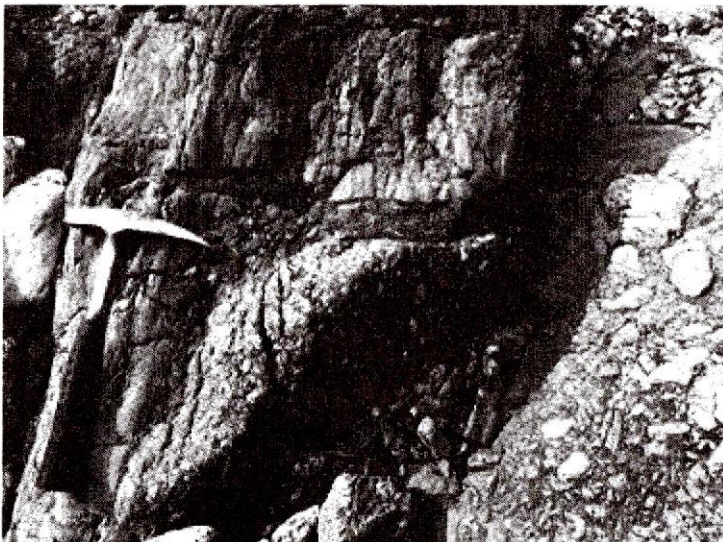
このデイサイト柱状節理にはザクロ石(ガーネット)、紅柱石、珪線石、コランダム(別名鋼玉。サファイヤやルビーもこれの一種)などが含まれているそうで、解説されていた吉倉先生からその事を聞いた瞬間、みんなの目の色が明らかに変わりました。やっぱり皆さん、鉱物・宝石には弱いようです(私も弱いのですが)。

そのあと、思い思いの場所に散らばって石を割りました。デイサイトは思いのほか硬く、みんな苦戦していたようです。ザクロ石だけは結構見つかったようでしたが、最大でも径2mmくらいだったようです。

残念。

次に向かったのは唐越礫岩。河川敷に露出した露頭の観察です。

礫岩というのはご存知のように、堆積岩の一種で砂粒よりも大きな石が含まれているものです。確かに大きな粒子が含まれているという点においては礫岩といえるのですが、含まれる礫のサイズは大きいもので1m、小さいものは目に見えないものまで、礫の配置にも向きにもパターンは見出だせず、まるでアスファルトでもに固められてしまったようで、とても通常の堆積作用で作られたとは思えません。



唐越礫岩は、成因が謎に包まれているそうです。

しかし! サイエンスを志すものが雁首揃えて「不思議だね」なんて言っちゃいけません。不思議を不思議で片付けていたら、ニューサイエンスや超常現象などのアホ話の跋扈を許してしまうことになりかねません。これは、非常に重要なことです。

……というわけで、Let's think!

「液状化現象でできたとか?」

「火砕流じゃない?」

「いや、実は普通の堆積作用で」

……。

結局、コレだ! という有力な仮説は出ませんでした。そりゃそんなに甘くはないか。高知大の卒業生にでもがんばってもらいましょうか。私? 私はやりません。(←こら!)

最後に向かったのは虎石(流紋岩)の露頭。白い岩にオレンジの縞が岩の中心から外側に向かって

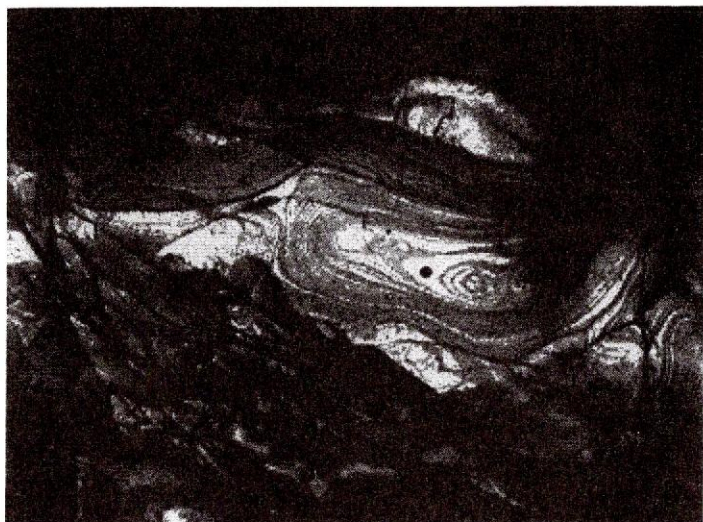
立体的、放射状に幾重にも重なっており、結構綺麗です。水石として珍重されたという話もうなずけます。

ちなみに水石とは、

「形や色のすぐれた自然のままの石。小さな自然石から山水の趣を味わおうとするもの。山水石。」

(日本語大辞典)

のことだそうです。



普通、勉強というのは室内でやるものですから、こんな晴天の日は「こんな良い天気なんだから勉強なんかしていないで……」なんて台詞が出ようものですが、地学の勉強は屋外でできます。つまり、息抜きと勉強が同時にできるのです。なんとすばらしいことでしょう!! 今回の巡検には初参加の方がたくさんおられましたが、皆さん一様に楽しんでいただけたようです。

後から聞きましたが、会員の佐藤さんが撮影された当日の様子がNHKテレビで流れたそうです。また、今回の活動の様子を写した写真は、ホームページに掲載してあります。

<http://sc1.cc.kochi-u.ac.jp/KCK/>

ホームページは近頃更新したので宜しければ見てください。(宣伝)